

仁^に
和^な
寺^じ



景弘が、芙蓉の使いの者に案内されて、仁和寺の広大な敷地の中の堀河の尼の草庵に出向いたのは、鞍馬寺へ西行法師を訪ねた、しばらく後のことであった。

「馬を用意しておりまする」

と、使いの者は告げていたが、景弘は、自分は乗馬せず、手綱を引いて歩いた。

六波羅の平家屋敷から、景弘は、川向こうに広大な川原院を眺めながら五条大橋まで上り、鴨川を渡って大路を西に向かった。

五条大路の両側には、貴族の館が連なっていたが、朱雀大路を過ぎるあたりから鬱蒼と茂った森は漆黒の闇をもたらし、この五月の夜、景弘は殆ど暗がりの中を歩まねばならなかった。

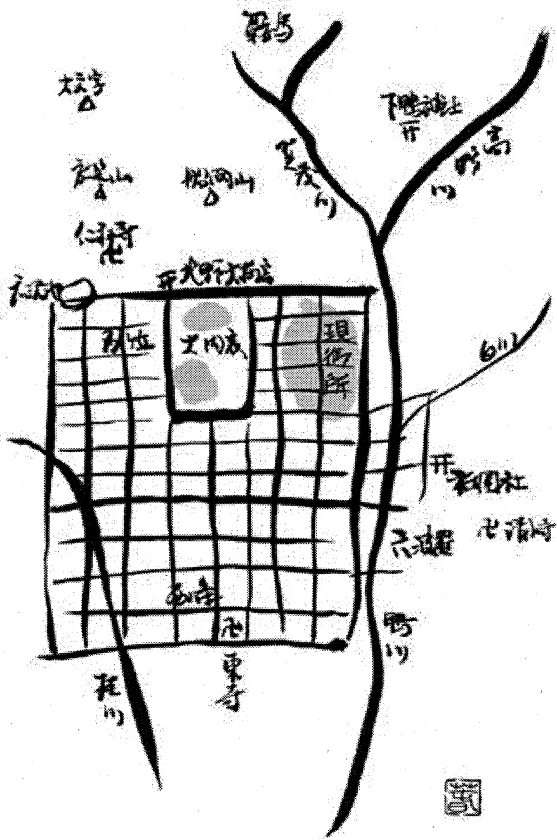
都に慣れぬまま、日が経っていた。

この夜も、景弘は自分の背後をつけて来る者の気配を悟っていた。

清盛の身辺警護の侍の中に、身を置いていた景弘だったが、父と田所の伊佐が国へ帰るとき、残

していった若い郎党がいた。大野の赤人の甥、小鷲丸である。幼い頃から兄弟のように過ごしてきた小鷲丸は、景弘にとってもつとも心を許せる相手であった。

「やはり、小鷲丸を供に連れてくればよかった…」



そう悔いていた。

景弘と年齢は変わらぬが、二人はまだ十七の若者であっても、互いに背丈は大人を抜きんでている体格のよさを誇った。

小鷲丸は、優しげな名に似ぬ胆力に秀でた若者だった。

景弘が腰に帯びている剣は、短いが頑丈なつくりの備前物で、肉薄した戦いでは恐ろしい威力を発揮した。

景弘と小鷲丸は、この重い刀を自在に揮った。

「いざとなれば、自分の身は自分で守る」

その覚悟はできていたし、その自信もあった。

西大宮大路を北に折れてもしばらく森が続くが、大内裏の周囲に巡らされた大垣が見えるころ、ふたたび

大きな館が並び始めた。

大内裏の横の西大宮大路を進むと、仁和寺はすぐ近い。

仁和寺は、光孝天皇により発願されたが途中で崩御し、次の宇多天皇が仁和四年（八八八年）に完成させた。宇多天皇は在位十年で譲位し出家、延喜四年（九〇四年）に仁和寺に御室を建立し崩御するまでそこに住んだ。そのため仁和寺は、皇室の尊崇を受け、門跡寺院として大いに栄えた。

この時、門跡は、白河天皇の第四子である覚法法親王であった。

仁和寺は、北の大内山から南は双ヶ丘、東は衣笠山一帯から西は広沢池と、大内裏の西北に広大な寺域を占めていた。その中には、子院も含めて七十を超える大伽藍があり、壮観を極めた。

この仁和寺の中の小さな流れの畔に、小柴折の垣で囲んだ草庵があり、使いの者が案内を請うと、庵の中で灯が点り、芙蓉が顔を出した。

「お待ち申しております」

芙蓉は、景弘に、ひどく他人行儀な挨拶をし、馬の手綱を受け取ると庭先の立ち木に結びつけた。門の脇に設けた閑伽棚には、水甕と一緒に季節の野花が活けられてあった。

景弘が、ふと気づくと枝折戸の陰に、二人の男がひっそりとしやがみこんでいた。

「後をつけてきたのは、この男たちであったか……」

芙蓉は、男たちに何やら声をかけ、すると男たちは煙のように消えていた。

「そうか。このわしを警護していたのか」

景弘は、ようやく気づいていた。

姿が消えた後も、男たちの気配がずっと残っていた。

「庵主さま」

芙蓉は、庵の奥に向かって声をかけた。

「あのお方が、堀河の尼さまでござります」

明かりを提げた芙蓉に案内された景弘は、庵の中の座敷に端座している尼僧姿の女性に迎えられた。

「ようこそ。おいでなさいませ」

頭巾を取った女性の端正な顔は、息を呑むばかりの気品と美しさがあつた。

髪をおろした頭は短い髪が整えられ、子どものようなあどけなさが、景弘の気持ちを楽にしていた。「芙蓉が、お世話になり、お礼を申し上げます」

尼は、端座した姿勢のまま、そう告げた。

「これには、当庵で、和歌の道と共に書や舞の嗜みを躰けております」

尼との対面は、無用な窮屈を感じさせることなく、景弘は何やら居心地よささえ覚えていた。

「鞍馬の山で、芙蓉とおうたとか：お父上の夢を叶えたいとの話も伺いました」
尼の顔に微かに笑みがこぼれていた。

堀河の尼は、白河院皇女の二条大宮令子内親王に出仕し、六条と呼ばれた。

後に鳥羽天皇の中宮であり白河院とも通じていた待賢門院璋子に仕え、堀河局と呼ばれるようになった。

璋子は、院に上る前から祇園女御の養女でもあつた。

康治元年（一一四二年）、主人の璋子は、藤原得子との息子の皇位争いに敗れ落飾する。璋子は、兄が門跡である仁和寺に庵を設け、一緒に出家した堀河と住んでいた。

清盛が安芸守に就任する前年、璋子は亡くなり、尼となった堀河は一人で暮らし続けていた。

堀河の尼は、和歌の道の達人として知られ、仁和寺で西行との交流があつたことは、西行の歌集『山家集』でも知られる。

鞍馬寺で会った西行が、清盛と共に北面の警護侍であつた頃、宮中に侍っていた堀河の尼は、清盛の表も裏も熟知しているに違いないと、景弘は直感した。

「今宵は、ここでゆつくりと寛がれ、夕餉など召されよ」

尼は優しく微笑みながら、そう告げた。

「もったいなきお言葉…」

「芙蓉は、卦易の道に明るく、鞍馬の山にて武術修行もしておる…」

景弘は、尼の深い湖を思わせる瞳と静かな物腰に、いつしか魅入られていた。

「この芙蓉、幻術も遣う…せいぜいご用心遊ばすよう…」

堀河の尼は、そう告げて哄笑した。

開け放した裏戸から、庭をとおして庵の中にまで青い霧が流れ込んでいた。

堀河の尼と会った後、景弘は芙蓉に案内されて、「北野の前」の名の由来である北野神社の境内を歩いた。

境内の小さな森の中に、まだ新しい祠があり、その前に額ずいた芙蓉は、

「庚申さま」

と、告げた。

庚申とは、干支の「かのえさる」。路傍に、恐ろしい憤怒の顔した青面金剛とその下に三猿を彫った石像を祀っており、病魔を払い除く威力があると信じられた。

「小さくとも、お祇園さまより、こちらの方が力は強うござります」

芙蓉は、そう告げた。

「お前さま」

芙蓉は、景弘に呼びかけた。

「わらわのこと、憎からず思うてくださるお前さまのお心…わかっております」

まっすぐな目で自分をみつめる芙蓉に、景弘は戸惑っていた。

「お前さまの采女うねめとなりましょう…」

芙蓉がそう口にしたことを景弘もまた心に折り畳んでいた。

清盛が、祇園社境内で卦易けえきを生業なりわいにしている芙蓉のことを知ったのは、間もなくのことであった。

「景弘。北野の前という卦けを見るおなごを、祇園社の境内に連れてきたというは、まことのことか…」

ある日、景弘は、六波羅の屋敷で、清盛にそう声をかけられた。

清盛の旺盛な女への興味と好奇心を、景弘も気づかされていた。

「美しいおなごか」

と、清盛は訊たずねた。

「その女と、いずこで知り合ったのじゃ」

「祇園社の境内で知り合いました」

「隅に置けぬの」

芙蓉は、一度、六波羅の屋敷へ景弘に連れられて訪れていた。

景弘が清盛の警護侍の一人に加えられた札にと、父の頼信よりのぶが安芸の山の幸海の幸を船で運ばせていた。

「忠盛ただもりさま、清盛さまの、気鬱きうつ散じに」

景弘は、屋敷の主の忠盛に、そう申し入れていた。

安芸国の貢物と共に、景弘は、装いを凝らした巫女みこを連れてきていた。

これは堀河の尼の意を酌んだ芙蓉の入れ知恵であった。

巫女みこたちに舞を仕込んだのは芙蓉だった。

桃はなかんざしの花簪を差して居並ぶ白拍子姿しらびょうしの巫女みこに、清盛は好奇な目を注いでいた。

「先まずは、春の舞を献じましょうぞ」

庭先に控えた景弘と小鷲丸は、館の回廊に座っている忠盛に、そう声をかけた。

「これは、上賀茂神社に伝わる里神楽でござりまする」

若い巫女みこたちが白拍子姿で鈴を手に、銅拍子どびょうしと鼓つづみ・太鼓の音に、素朴な動きで舞った。

「ちゃんぽん…よな」

清盛は、そう声を上げた。

上賀茂神社の奉納舞に、巫女みこたちが踊る「ちゃんぽん」と市井しせいで呼ばれる里神楽があった。単純な音律

で舞われる神楽は、雅楽や猿楽などに比べ、ひどく快活で明るいものだった。

舞う娘たちの無邪気さが、若い清盛にとって新鮮だった。

この日、芙蓉は男の子が着るような狩衣かりぎぬを身に纏まとい、髪を男鬘おとこまげに結い烏帽子えぼしを被かぶっていた。美しい少年。

誰の目にもそう見えた。

清盛と景弘は、この日、小者一人を連れただけの「忍び」の外出であった。

初夏の夜は、雨催いで、仁和寺までの道程は、湿っぽい風が吹いた。

寺領の北方に広がる鬱蒼と茂る森は、昼なお暗く、日暮れると人影は絶えた。

「仁和寺近くの草庵に住まいおりまする」

と、景弘は明かしていた。

下馬した景弘が声をかけると、庵の中から応じる声が返り、芙蓉は既に庵の小座敷に端座していた。

「かの者よな」

庵の中に目を凝らした清盛は、入り口に控えた景弘を後に、座敷へ上がりこんでいった。

この夜も庵の中には青い霧がたちこめていた。

霧の中に端座している芙蓉は、面を伏していた。

「顔を上げて見せよ」

と、清盛は命じた。

景弘は、清盛の顔に好奇な色が走ったことを見て取っていた。

「祇園社の境内にて卦を見ることを生業にしておると聞いておる…お前の素性、明らかにせよ」

それに応えることなく、芙蓉は、ゆっくりとした動作で背後から盆を取り出すと、二人の前に湯飲み茶碗を差し出した。

「田舎家のことで、もてなしの術もありませぬ」

と、芙蓉は歌うように告げた。

「これは…」

臆することなく湯飲みにも口をつけた清盛は、ふと戸惑っていた。

「夏の暑さしのぎの、ささでござりまする」

嫣然と微笑む芙蓉に、急かされたように清盛は一気に湯飲みの酒をあおった。ここにきて景弘は当惑していた。

その刹那、清盛は、思いがけない行動に出た。

矢庭に清盛は馬乗り袴の裾を翻して立ち上がると、芙蓉の肩に手をかけ、引き起こそうとした。次の瞬間、一段と青い霧が濃くなり、清盛の体を包み込んだように見えた。

「物の怪よな…」

と、清盛が叫んだ声を景弘は覚えていた。

清盛の佩刀が霧の中で煌いた。

芙蓉の姿は忽然と消えていた。

清盛は庵の畳の上で短い間眠った。

そして、その帰途、清盛は瘧のような高熱を発していた。奇妙なことに清盛は、その夜のことは一切記憶になかった。

「あれが、鞍馬の幻術か…」

と、景弘は、芙蓉の術にかかった清盛の姿に驚くばかりであった。